

乳幼児をもつ母親のストレス反応に影響を与える要因の研究

—乳幼児発達の相談支援—

Factors Affecting Stress Responses of Mothers Having Infants —Support in Development Consultation Service of Infants—

白石京子*

Kyoko SHIRAISHI

要旨：本研究は乳幼児をもつ母親を対象に、ストレス反応に影響を与える諸要因を調査し、育児中の母親への相談支援の指針を得ることを目的とした。回収した141名の調査紙について重回帰分析した結果、ストレス反応に影響を与える要因として育児ストレスとコーピングが見出された。ストレス反応に正の影響を与えていた要因は、定型発達児の母親では「子どもの聞き分けのない行動」「子どもの食行動における問題」「親としての対応」とカタルシス、障害児の母親では「親としての対応」と回避的思考、責任転嫁であった。また負の影響を与えていた要因は、定型発達児の母親では肯定的思考、障害児の母親では気晴らしであった。この結果を相談支援に繋げると、定型発達児の母親には楽観的・前向きになれるような言葉かけをすること、障害児の母親にはスポーツやお喋りといった気晴らしを勧めることが母親のストレス緩和に有効と考えられる。

キーワード：母親のストレス反応, ストレスコーピング, 育児ストレス, 相談支援

I. 問題・背景

従来、乳幼児の子育ては大家族や地域社会において多くの人々の手を介して行われてきたが、近年は核家族化や人間関係の希薄化が進み、母親一人の手に委ねられるようになって来ている。その結果、母親は育児ストレスや育児不安を抱えるようになり、心理的・身体的負担感が高まっている。実際、負担感の一つの顕われとされる児童虐待の相談対応件数は、平成28年度は全国で122,578件であり、平成2年度の1,101件と比べると実に111.3倍に激増している（厚生労働省2017）。そのような状況は母親本人のみならず、子どもの「育つ環境」にも好ましいとは言えず（中山ら2013）、適切な支援が望まれる。

乳幼児を抱える母親への支援には様々なものがあるが、相談支援もその一つである。相談支援とは「子どもの保育の専門性を有する者が、保育に関する専門知識・技術を背景としながら、保

* しろいし きょうこ 客員研究員・文教大学人間科学部（非常勤）

護者が支援を求めている子育ての問題や課題に対して、保護者の気持ちを受止めつつ、安定した親子関係や養育力の向上をめざして行う子どもの養育（保育）に関する相談、助言、行動見本の提示その他の援助業務の総体」と定義でき、母親のストレス緩和に有効とされる（中山ら 2013）。

しかし実際にストレスを緩和させるには、ストレスを生み出すメカニズムを理解した上で、適切な支援を行う必要がある。ストレス発生のメカニズムについては、日常生活上の出来事（ストレッサー）に対する認知的評価が対処行動（コーピング）を決定し、その結果が心身症状（ストレス反応）として表れるという心理学的モデルが有名である（Lazarus & Folkman 1984）。このモデルに従えばストレッサーとコーピングが母親のストレス反応に与える影響を明らかにすることで初めて、有効な相談支援が可能になると考えられる（榮ら 2003）。さらに認知的評価やコーピングの決定、ストレス反応の顕われ方には、母親の個人属性やソーシャルサポートが関与していると考えられることから（平田 2011, 尾野・茂木 2012）、ストレッサー、個人属性、コーピングがストレス反応に影響を与えるというモデルを設定した。

このモデルに基づいて、乳幼児を持つ母親のストレス反応に影響を与える要因に関する先行研究を俯瞰すると、ストレッサーと個人属性がストレス反応に与える影響について調べた研究は多い（平田 2011・杉本 2008）。一方、母親のコーピングに関する研究も多いものの、ストレス反応や育児ストレスとコーピングの関連を調べたものが大部分である（堀部 2013, 丸山 2012, 細野・野村 2010）。コーピングがストレス反応に与える影響について調べた研究は少なく、辛うじて Miller ら（1992）や Hastings ら（2005）の研究がある。Miller らは身体障害児の母を対象として調査を行い、逃避等の情緒焦点型コーピングは心理的ストレスを増加させ、問題解決コーピングは減少させると報告している。一方 Hastings らは、回避型コーピングはストレスを増加させ精神的健康を低下させ、ポジティブなコーピングは逆にストレスを低下させることを報告している。しかしこれらの研究はいずれも障害児の母親を対象としたものであり、一般の相談支援に役だてることが難しい。そのため、本研究では相談支援に資することを目的として、コーピングに着目して、乳幼児を持つ母親のストレス反応に関連する要因の研究を行うことにした。

以前筆者は定型発達児と障害児の母親を対象に、そのストレスに影響を与える要因を調べたところ、定型発達児の母親については統制的な養育態度が、障害児の母親についてはソーシャルサポートが負の影響力を持っていることを発見した（白石 2017）。また尾野・茂木（2012）も同時多母集団分析により、2群のストレス反応の発生メカニズムが異なることを報告している。これらは障害児の母親と定型発達児の母親とではストレスの抑制因子が異なることを示唆しており、本研究においても2群に分けてストレス反応に影響を与える要因を調べ、相談支援に活用することにした。

II. 方法

2017年5月～8月にかけて、関東にある子育て支援広場・療育施設等に参加した0～7歳の子どもの母親141名（定型発達児の母親75名、障害児の母親66名）に対し、その場で調査紙を配布し、回収した。その後、定型発達児の母親と障害児の母親各5名に対し、インタビューを行った。

1) 個人属性

母親の子どもの数、子育て支援広場・療育施設等に参加した子どもの年齢・性別、母親・父親

の年齢、子どもの世話をする祖父母の年齢 家族構成、母親の仕事を尋ねた。

2) 心理的ストレス反応尺度 (Stress Response Scale-18 : 18 項目 4 件法)

鈴木ら (1997) が開発した尺度であり、精神的健康 (抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力) を測定する。本尺度はストレス過程で引き起こされる主要な心理的ストレス反応を多面的に測定することを目的に開発された尺度で、日常生活の中で経験される心理的变化に関する項目群によって構成されている。

3) 3次元コーピング尺度 (Tri Axial Coping Scale-24 : 24 項目 5 件法)

3次元コーピング尺度はコーピングをe次元 (問題 - 情動次元、接近 - 回避次元、行動 - 認知次元) に沿って8つに分類した上で (カタルシス、放棄・諦め、情報収集、気晴らし、回避的思考、肯定的思考、計画的立案、責任転嫁)、それぞれのできている度合いを測定するものであり、高い信頼性が確認されている (神村ら 1995、鈴木 2004)。

4) 育児ストレスサー (31 項目 4 件法)

日下部・坂野 (1999) が開発し、信頼性・妥当性が確認されている育児上のストレスサーを測定する尺度である。榮ら (2003) は3歳児健診に来所した母親344名に本尺度の質問紙調査を依頼し、143名分の有効回答に対して因子分析を行ったところ、「子どもの聞き分けのない行動」「自分の時間がない」「一人きりの子育て・社会からの孤立」「夫の無理解・非協力的態度」「子どもの食行動における問題」「親としての対応」「子どもにまわりつかれること」「子どもに食べさせること」の8因子が抽出された。

5) インタビュー

以下の5点を軸にインタビューを行った。①有効なサポート (夫や実家、専門家による相談等) は何か。②ストレスを感じるサポートは何か。③欲しいサポート (情緒的、情動的、道具的) は何か。④強いストレスを感じていることは何か。⑤実践しているコーピングは何か。

調査で得られた結果に対し、定型発達児の母親と障害児の母親の2群に分け、個人属性、育児ストレスサー、コーピング、ストレス反応の比較を Mann-Whitney の U 検定あるいはカイ二乗検定で行った。次に各群に対し、ストレス反応と属性、各尺度間の相関分析を行い、最後にストレス反応を目的変数、個人属性、育児ストレスサー、コーピングを説明変数として重回帰分析を行った。

実施にあたっては、園長に調査を依頼し、研究の趣旨を書面及び口頭で説明し了承を得た。調査協力者には、個人情報やプライバシーを侵すことはないこと、途中で辞退できること、得られたデータは研究以外の目的で使用しないこと、アンケートへの回答をもって研究の同意とすることを明記した説明文を手渡し、説明を行った。収集したデータは、施設下で管理を行い、収集したデータを分析する際及び結果を公開する際には、データをコード化し個人が特定されないように配慮した。

Ⅲ. 結果

回収率は100%であり、ほとんどの設問で有効回答率は95%以上であったため、全回答 (141名) を分析対象とした (表1)。定型発達児の母親と障害児の母親の間には、子どもの数・性別・歳、母親・父親の歳、祖父母の歳において有意な違いがあった。障害児母は定型発達児母に比べ、子どもの数が多く ($p < .001$)、母親とともに子育て支援広場・療育施設に参加した子どもには男

表 1 個人属性の比較

個人属性	定型発達児の母親					障害児の母親					P 値		
	n	中央値 / 比率 ^a				n	中央値 / 比率 ^a						
子どもの数 ^b	75	1				66	2				<.001 ^e		
子ども ^d の性別	74	男 48.6%				66	男 72.7%				.004 ^e		
子ども ^d の歳	75	0-2 歳	3-5 歳	6-8 歳	9-15 歳	66	0-2 歳	3-5 歳	6-8 歳	9-15 歳	<.001 ^e		
		70.7%	28.0%	0.0%	1.3%		10.6%	43.9%	31.8%	13.6%			
母親の歳	75	20 代	30 代前半	30 代後半	40 代前半	40 代後半	64	20 代	30 代前半	30 代後半	40 代前半	40 代後半	<.001 ^e
		12.0%	49.3%	24.0%	14.7%	0.0%		1.6%	20.3%	26.6%	32.8%	18.8%	
父親の歳	73	20 代	30 代前半	30 代後半	40 代前半	40 代後半	61	20 代	30 代前半	30 代後半	40 代前半	40 代後半	<.001 ^e
		8.2%	42.5%	30.1%	17.8%	1.4%		4.9%	14.8%	27.9%	27.9%	24.6%	
子どもの世話をする祖父または祖母の歳	66	50 代	60 代	70 代			53	50 代	60 代	70 代		<.001 ^e	
		19.7%	68.2%	12.1%				3.8%	50.9%	45.3%			
家族構成	75	核家族	祖父母同居	一人親			66	核家族	祖父母同居	一人親		.316 ^e	
		89.30%	10.70%	0.00%				81.80%	16.70%	1.50%			
母親の仕事	75	専業主婦	正社員	パートタイム	その他	65	専業主婦	正社員	パートタイム	その他	.733 ^e		
		66.70%	16.00%	12.00%	5.30%		61.50%	13.80%	15.40%	9.20%			

- a) 子どもの数は中央値、それ以外は比率
 b) 平均値±標準偏差はそれぞれ 1.43±0.55、1.97±0.80
 c) Mann-Whitney の U 検定
 d) 子育て支援広場・療育施設に参加した子ども
 e) カイ二乗検定

表 2 各尺度得点の比較

尺度	下位尺度	定型発達児の母親			障害児の母親			P 値 ^a
		中央値	平均値	標準偏差	中央値	平均値	標準偏差	
育児ストレス	子どもの聞き分けのない行動	2.57	2.55	0.70	2.64	2.69	0.70	.242
	自分の時間がない	3.00	2.97	0.78	2.92	2.90	0.73	.503
	一人きりの子育て・社会からの孤立	2.20	2.34	0.74	2.20	2.22	0.76	.345
	夫の無理解・非協力的態度	2.00	2.02	0.94	1.67	1.98	0.91	.855
	子どもの食行動における問題	2.33	2.24	0.83	2.00	2.07	0.73	.248
	親としての対応	2.00	2.05	0.69	2.33	2.24	0.62	.089
	子どもにまどわりつかれること	2.50	2.34	0.96	2.00	2.16	0.96	.269
	子どもに食べさせること	2.00	2.43	1.10	1.50	1.88	1.05	.003
コーピング	カタルシス	12.00	11.28	2.44	11.00	10.86	3.55	.798
	放棄・諦め	7.00	7.08	2.44	6.50	6.44	2.44	.265
	情報収集	10.00	9.97	2.11	11.50	10.88	3.37	.003
	気晴らし	9.00	8.73	2.11	9.00	8.71	3.35	.845
	回避的思考	8.00	8.37	2.23	8.00	7.41	2.89	.129
	肯定的思考	11.00	10.67	2.13	11.00	10.11	3.35	.497
	計画的立案	10.00	9.93	2.27	11.00	10.62	3.56	.029
	責任転嫁	6.00	5.67	2.37	5.00	5.48	2.50	.887
ストレス反応	抑うつ・不安	8.00	8.85	3.45	11.00	11.74	4.76	<.001
	不機嫌・怒り	9.00	10.37	3.65	11.00	12.38	4.60	.006
	無気力	10.00	10.45	4.08	13.00	12.94	4.43	<.001
	総合得点	27.00	29.68	10.40	36.00	37.06	12.56	<.001

- a) Mann-Whitney の U 検定

性が多く ($p<.01$)、歳も高く ($p<.001$)、母親・父親の歳も高く ($p<.001$)、祖父母の歳も高かった ($p<.001$)。一方、家族構成と母親の仕事では両群に有意差はなかった。両群を通してみると、最頻値は子どもの歳では3~5歳、祖父母の歳では60代、家族構成では核家族、母親の仕事では専業主婦であった。

次に各尺度得点の比較を行ったところ(表2)、育児ストレスラーの下位尺度では両群間の有意差はほとんどなく、ただ「子どもに食べさせること」のみ、定型発達児母の方が有意に高かった ($p<.01$)。コーピングでは情報収集 ($p<.01$) と計画的立案 ($p<.05$) において、障害児母の方が有意に高かった。ストレス反応では全下位尺度および総合得点において、障害児母の方が有意に高かった ($p<.01$)。両群を通して見ると、育児ストレスラーでは「自分の時間がない」、コーピングではカタルシス、ストレス反応では無気力の得点が高かった。

続いて個人属性、育児ストレスラー、コーピングとストレス反応との相関を分析したところ、個人属性については有意な相関をもつ下位尺度の組み合わせは、両群ともになかった(表3)。育児ストレスラーについては、相関は全て正であり、「子どもの聞き分けのない行動」「自分の時間がない」「親としての対応」は、両群とも有意であった ($p<.05$)。一方、「一人きりの子育て・社会からの孤立」「夫の無理解・非協力的態度」「子どもの食行動における問題」「子どもに食べ

表3 ストレス反応との相関

	定型発達児母				障害児母				
	抑うつ・不安	不機嫌・怒り	無気力	ストレス合計	抑うつ・不安	不機嫌・怒り	無気力	ストレス合計	
個人属性	子数	.012	.095	-.087	.003	-.082	-.193	-.187	-.168
	男女	.095	.083	.128	.113	-.046	-.110	-.100	-.093
	歳	.168	.263*	.097	.186	-.124	-.011	.044	-.036
	母歳	-.178	-.037	-.136	-.126	-.052	-.096	.023	-.047
	父歳	-.004	.064	-.029	.011	.072	.078	.065	.079
	祖父母歳	-.169	-.068	-.185	-.154	.027	.009	-.083	-.015
	育児ストレスラー	子どもの聞き分けのない行動	.508***	.597***	.495***	.572***	.362**	.304*	.348**
自分の時間がない		.433***	.438***	.453***	.475***	.331**	.229	.373**	.341**
一人きりの子育て・社会からの孤立		.440***	.382***	.488***	.472***	.156	.136	.211	.183
夫の無理解・非協力的態度		.219	.346**	.379***	.343**	-.078	-.093	.139	-.015
子どもの食行動における問題		.371**	.452***	.357**	.422***	.183	.096	.228	.185
親としての対応		.361**	.345**	.476***	.427***	.352**	.309*	.517***	.429***
子どもにまわりつかれること		.105	.106	.263*	.176	.293*	.255*	.369**	.334**
子どもに食べさせること		.438***	.453***	.514***	.506***	.179	.154	.155	.179
コーピング	カタルシス	.223	.266*	.130	.218	.201	.103	.061	.136
	放棄・諦め	.207	.242*	.352**	.291*	.269*	.248*	.183	.257*
	情報収集	.202	.219	.229*	.233*	.098	.077	.104	.102
	気晴らし	-.011	.017	-.017	-.005	.003	-.027	.079	.019
	回避的思考	.007	-.016	.054	.018	.204	.246*	.068	.192
	肯定的思考	-.171	-.275*	-.241*	-.247*	-.192	-.142	-.098	-.159
	計画的立案	.140	.036	.174	.127	-.009	-.046	.118	.021
	責任転嫁	.085	.090	.118	.106	.392**	.437***	.338**	.428***

* : $p<.05$, ** : $p<.01$, *** : $p<.001$

させること」は定型発達児母のみ有意であり ($p<.01$)、「子どもにまわりつかれること」は障害児母のみ有意であった ($p<.05$)。全体的に定型発達児母の方が、相関が強かったが「子どもにまわりつかれる」だけは障害児母の方が強かった。コーピングについては、放棄・諦めは両群とも正で有意 ($p<.05$)、肯定的思考は定型発達児母のみ負で有意 ($p<.05$)、責任転嫁は障害児母のみ正で有意 ($p<.01$) であった。

さらにストレス反応を目的変数、属性、育児ストレス、コーピングを説明変数として重回帰分析を行ったところ、抑うつ・不安については、定型発達児母はカタルシス、障害児母は責任転嫁が正の有意な影響を与えていた ($p<.05$, $p<.01$; 表4)。不機嫌・怒りについては、定型発達児母は育児ストレス（「子どもの聞き分けのない行動」「子どもの食行動における問題」）、カタルシス、情報収集が正の、肯定的思考が負の有意な影響を与えていた ($p<.05$, $p<.01$)。障害児母では回避的思考、責任転嫁が正の、気晴らしが負の有意な影響を与えていた ($p<.05$)。無気力については、定型発達児母では育児ストレス（「親としての対応」）が正の、肯定的思考が負の有意な影響を与えており ($p<.05$)、障害児母では育児ストレス（「親としての対応」）と責任転嫁が正の有意な影響 ($p<.05$) を与えていた。

最後に①有効なサポートは何かと尋ねたところ、両群とも夫と答える人が多かったが（定型発

表4 ストレス反応を目的変数とした回帰分析

尺度	説明変数	抑うつ・不安		怒り・不機嫌		無気力	
		定型発達児母	障害児母	定型発達児母	障害児母	定型発達児母	障害児母
個人属性	子数	-.020	.146	.039	-.143	-.050	-.032
	男女	.022	-.047	-.021	-.022	.011	-.028
	歳	-.004	-.021	.009	.342	.020	.219
	母歳	-.221	-.107	.094	-.384	-.136	-.098
	父歳	.044	.022	-.155	.169	-.073	.010
育児ストレス	子どもの聞き分けのない行動	.294	.081	.322*	.052	.109	.045
	自分の時間がない	.135	.161	.123	.090	.131	.071
	一人きりの子育て・社会からの孤立	.182	-.050	-.026	-.032	.054	-.204
	夫の無理解・非協力的態度	-.120	-.083	.093	-.226	.032	.106
	子どもの食行動における問題	.052	-.018	.267*	-.170	-.001	.125
	親としての対応	.140	.165	-.013	.237	.320*	.417**
	子どもにまわりつかれること	-.196	.258	-.166	.209	-.062	.291
子どもに食べさせること	.219	-.108	.157	.139	.202	-.075	
コーピング	カタルシス	.347*	.301	.482***	.083	.265	-.320
	放棄・諦め	-.118	-.102	-.074	-.382	.080	-.096
	情報収集	.165	.124	.282*	.397	.144	.275
	気晴らし	-.048	-.379	-.123	-.405*	.016	-.235
	回避的思考	-.129	.346	-.187	.475*	-.172	.198
	肯定的思考	-.170	-.326	-.397**	-.096	-.299*	-.161
	計画的立案	.088	-.018	.106	-.238	.254	.334
	責任転嫁	.076	.401**	.082	.507***	-.026	.330*
		.528** (.348)	.549* (.306)	.675*** (.541)	.607** (.395)	.588*** (.419)	.552* (.311)

* : $p<.05$, ** : $p<.01$, *** : $p<.001$

達児母「休日、子どもを夫に預けて、美容院に行くのがリフレッシュ」、障害児母「できるだけ早く父親を巻き込んで協力してもらう必要があるし、深刻度や真剣みが違う」、定型発達児母は実家、障害児母は専門家による相談と答える人も多かった（障害児母「前向きにやろうとする時と、疲れていい加減にもなる。忍耐が必要。だからこそ、制度や専門相談の支援や的確な情報が必要」）。

②ストレスと感じるサポートでは、定型発達児母は夫にストレスを感じている人が多かった（「夫は愚痴を聞いてくれない」「夫にゴルフに行かれると、悔しい、仕事と言いながら、にやにやして楽しそう」）。

③欲するサポートについては、両群とも情緒的、情動的サポートを欲しているものの、定型発達児母は情緒的サポート、障害児母は情動的サポートを最も欲していた（「忍耐が必要。だからこそ、制度や専門相談の支援や的確な情報が必要」「先に情報収集していることで自信になる」）。

④強いストレスを感じることは、定型発達児母は世間からの孤立（「自分もバリバリ働いていた時もあったのに。このまま、自分の人生、埋もれるのか心配」）や子どもの食行動（「子どもにだらだら食事されるのが嫌。汚いのが嫌」）、参考にできる子育てモデルがないという意見（「育児は何をモデルにしているのか、わからない。子育ての特効薬はないのか」）、障害児母は子どもへの関わり方（「子どものつきまといに体力がついていかない。どう関わればよいのか迷う・悩む」）、理想と現実のギャップにストレスを感じているという意見が多かった（「頑張ってきたことが、結果が上手くでなくて、むなしい」）。

⑤コーピングに関しては、両群とも「人に話して受け止めてもらう」という意見が多かった。それに加え定型発達児母は「楽観的に考える」、障害児母は「諦める」「気晴らしをする」や「援助を求める」も多かった。

IV. 考察

個人属性の比較では、障害児母は定型発達児母に比べ、子どもの数が多く、両親、祖父母の歳も高く、子育て支援広場・療育施設に参加した子どもは男性が多く、歳も上であった。つまり障害児の母親は子どもがある程度成長してから子育て支援広場・療育施設に参加していた訳である。これは母親が我が子の障害に気づき、支援を求めるまでに時間がかかることを示唆している。また両群ともに子どもは3~5歳、祖父母の歳は60代、家族構成は核家族で、母親は専業主婦が最も多かったが、これらの属性は乳幼児を持つ関東の母親の平均像であろう。

尺度得点の比較では、育児ストレスではほとんどの下位尺度で両群間の有意差はなかった。コーピングでは情報収集、計画的立案において、ともに障害児母の方が有意に高かった。ストレス反応では全下位尺度および総合得点において、障害児母の方が有意に高かった。障害児母はストレス反応が強いことは、先行研究でも示されている。例えば野邑（2007）は自閉症児の母親は抑うつ状態に陥りがちなことを（軽度も含めて約40%）、眞野ら（2015）はADHD児の母親は育児ストレスが有意に高いことを報告している。それにも拘わらず、育児ストレスについては両群とも同程度に受け取っており、障害児を持つからといって特に強く感じている訳ではなかった。これは障害児母が多用しているコーピング（情報収集、計画的立案）には緩衝作用が少ないことを示唆している。

個人属性、育児ストレス、コーピングとストレス反応との相関分析では、個人属性との有

意な相関は両群とも見いだせなかった。育児ストレスとの相関は「一人きりの子育て・社会からの孤立」「夫の無理解・非協力的態度」「子どもの食行動における問題」「子どもに食べさせること」は定型発達児母のみ有意であり、「子どもにまわりつかれること」は障害児母のみ有意であった。これは、障害児母は孤立や夫の無理解、子どもの食行動よりも、障害そのものがストレス反応を引き起こしているからと解釈できる。子どものまわりつきに関しては、野邑(2007)は自閉症児特有の自分のこだわりが満足できるまでつきまとう行為が、母親の精神的健康を悪化させることを示唆している。コーピングについては、負の有意な相関を示したのは定型発達児母における肯定的思考との相関のみであり、肯定的思考はストレス反応を低下させる可能性がある。

ストレス反応を目的変数とした重回帰分析によれば、ストレス反応を高めていたのは、定型発達児母では「子どもの聞き分けのない行動」「子どもの食行動における問題」「親としての対応」とカタルシス、障害児母では「親としての対応」と回避的思考、責任転嫁であった。またストレス反応を低下させていたのは定型発達児母では肯定的思考、障害児母では気晴らしであった。この結果は、母親全般に対しては「親としての対応」を軽減させることがストレス反応軽減に有効なことを示唆するものである。また定型発達児母に対しては「子どもの聞き分けのない行動や食行動」を軽減させ、カタルシスの代わりに肯定的思考を使用し、障害児母に対しては回避的思考、責任転嫁の代わりに気晴らしを使用することが良いことも示唆された。

インタビューでは、定型発達児母は、情緒的サポートを欲しており、社会からの孤立、夫の非協力的な姿勢、子どもの食事行動、参考にできる育児モデルがないことに不満を抱え、楽観的に考えることで対処していた。楽観的思考は肯定的思考と同様のコーピングであり、重回帰分析と同じ結果であった。一方、障害児母は、情動的サポートを欲しており、子どものまわりつきや親としての対応にストレスを感じ、我慢を重ねており、諦めたり気晴らしをしたり、援助を受けたりすることで対処していた。気晴らしの有効性は重回帰分析と一致していた。また両群とも人に話して受け止めてもらう対処法を採っており、相談支援の有効性が窺われた。

以上をまとめると、今回調査に参加した定型発達児の母親は比較若く、子どもの数が少なく、ストレス反応が弱かった。一方、障害児の母親は比較的高齢で、子どもの数も多く、情報収集、計画的立案のコーピングを多用しており、ストレス反応が強かった。またストレス反応を高めていたのは、前者は、子どもの聞き分けのない行動や食行動、カタルシス、後者では回避的思考、責任転嫁であった。さらにストレス反応を低下させていたのは前者では肯定的思考、後者では気晴らしであった。サポートについては、前者は情緒的サポート、後者は除法的サポートを欲していた。

なお、本研究の限界としては、関東在住の141名の母親に対しての調査であり、必ずしも一般化できるものではない点が挙げられる。また定型発達児の母親と障害児の母親の2群に分けて分析したが、どちらにも属しないボーダー児の母親を含んだ群分けや、障害受容のプロセス別に群分けをすることも考慮すべきだったかもしれない。これらは将来の課題として調査・分析を行う予定である。

参考文献

厚生労働省(2017)平成28年度児童相談所での児童虐待相談対応件数(速報値) <http://www.mhlw.go.jp/file/04>

- Houdouhappyou-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000174478.pdf (2018/1/15 閲覧)
- 中山智哉・渡邊望・春高浩美・木山徹哉 (2013) 母親の育児感情に影響を及ぼす要因の探索的検討 母親の育児方法・育児への省察および保育相談支援との関連 九州女子大紀要 50(2) pp15-29
- Lazarus, R. S., Folkman, S. (1984) Stress, Appraisal and Coping, Springer Publishing, New York
- 榮玲子・舟越和代・小川佳代・松村恵子 (2003) 乳幼児期の子どもをもつ母親のストレス：育児ストレス因子の解析 香川県立医療短期大学紀要 5 pp11-16
- 平田祐子 (2011) 幼稚園児を持つ母親の育児ストレス分析 関西学院大学人間福祉部研究 3(1) pp96-77
- 尾野明未・茂木俊彦 (2012) 障害児をもつ母親の子育てストレスへの対処とソーシャルサポートについて：多母集団同時分析による健常児との比較検討 ストレス科学研究 27 pp23-31
- 杉本令子 (2008) 育児ストレス・育児ストレスコーピングに関する研究動向 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要 14 pp133-147
- 堀部めぐみ (2013) 母親の産後1か月における育児ストレスおよびコーピングに関する研究 助産雑誌 67 pp64-70
- 丸山昭子 (2012) 未就園児を持つ看護師のバーンアウトの関連要因を検討 日本看護科学学会誌 32(2) pp44-53
- 細野博美・野村忍 (2010) 育児におけるコーピングレパトリーの拡充がストレス反応軽減に及ぼす効果 人間科学研究 23(1) pp72
- Miller, A. C., Gordon, R. M., Daniele, R. J., et al. (1992) Stress, Appraisal, and Coping in Mothers of Disabled and Nondisabled Children, Journal of Pediatric Psychology 17 pp587-605
- Hastings, R. P., Kovshoff, H., Brown, T., et al. (2005) Coping strategies in mothers and fathers of preschool and school-age children with autism, Autism 9(4) pp377-391
- 白石京子 (2017) 障害児をもつ保護者のストレスに影響を与える要因の研究一定型発達児をもつ保護者との比較—文教大学生生活科学研究所 39 pp93-100
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・他 (1997) 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究 4(1) pp22-29
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・他 (1995) 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 筑波大学教育相談研究 33 pp41-47
- 鈴木伸一 (2004) 3次元 (接近-回避、問題-情動、行動-認知) モデルによるコーピング分類の妥当性の検討 心理学研究 74(6) pp504-511
- 日下部典子・坂野雄二 (1999) 育児に関わるストレスの構造に関する検討 ヒューマンサイエンスリサーチ 8 pp27-39
- 野邑健二 (2007) 高機能広汎性発達障害児・者の母親の精神的健康への対応について 平成21年度厚生労働科学研究費補助金 障害保健福祉総合研究成果発表会報告書 日本障害者リハビリテーション協会情報センター <http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/kousei/h21happyo2/happyou03.html> (2018/1/15 閲覧)
- 眞野祥子・堀内史枝・宇野宏幸 (2009) 注意欠陥・多動性障害児の行動特徴と母親から子どもへの情動表出について：診断後の半構造化面接による検討 小児保健研究 68(1) pp28-38

